

## 教育学部の音楽科の合唱指導について(II)

著者	森 恭子, 田中 千義
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	46
ページ	51-57
発行年	1997-12-10
その他の言語のタイトル	A Method of Choral Teaching in the Music Section of the Faculty of Education (II)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/1082">http://hdl.handle.net/2298/1082</a>

## 教育学部の音楽科の合唱指導について (II)

森 恭子・田中千義

### A Method of Choral Teaching in the Music Section of the Faculty of Education (II)

Kyoko MORI and Chiyoshi TANAKA

(Received September 1, 1997)

#### はじめに

教職についた音楽科の卒業生が校内の合唱コンクールや県内・外の各主催の合唱コンクールの選曲のため音楽科を訪れることは前報でも述べたが、ここ数年の傾向として教育現場で中学生が好んで歌いたいと希望して選ぶ曲に宗教曲や、ア・カペラの曲が数多く含まれているという。そして卒業生が一樣に訴えてくることは宗教曲(邦人作品も入れる)の中には、拍子の変化が数小節毎にみられる曲もあるために合唱の指揮をするのが難しいというものであった。

これまでの音楽科の「合唱」の授業では、古い時代の合唱曲から現代邦人の作品までを二人の教官で担当し、音楽史教育も考慮して取り上げて演奏させてきたが、合唱指揮に関しては「合唱指揮法」として特別に学ばせることはほとんどなかった。

そこで私達は今回特に、宗教曲とア・カペラ(無伴奏)の曲を合唱指導ならびに合唱指揮をする際の必要な事柄を探り出し授業内容を検討した。尚検討するにあたっては、現在、本音楽科の卒業生が勤務している熊本市内の中学校の合唱部員が記述した「ミサ曲第一番(グローリア)を歌って」と題した感想文等を参考にして考えてみる。

#### I. グレゴリオ聖歌について

##### 1) グレゴリオ聖歌<sup>1)</sup>

キリスト教の初期においては他の宗教と同じように聖書の句や祈りの言葉を朗唱することから音楽がはじまった。迫害時代から各地の集会ではその地域に根ざした聖歌が歌われていたが、やがて各地の教会がローマ典礼に統一されるようになると、聖歌もローマのものが採用されるようになった。歴代のローマ教皇たちは音楽の重要性を認め、聖歌の編纂・整理に力を入れたが、中でも6世紀末のグレゴリオ1世は特に熱心にそれを行い、大規模な収集・整理を行った。その彼の名前にちなんでローマ教会の正式な典礼聖歌のことをグレゴリオ聖歌という。グレゴリオ聖歌は新しく制定されたものではなく各地の聖歌の総合であり、地域や民族を超えた普遍性をもつものである。キリスト教は16世紀に宗教革命がおこってプロテスタントが生まれるまで、グレゴリオ聖歌を唯一の聖歌として発展させ、ヨーロッパ音楽の礎としたのである。

## 2) グレゴリオ聖歌の特徴

- a. 柔軟で自然なリズムによっており、規則的な拍節をもたない。
- b. 順次進行の多い、なめらかな旋律をもち、音域もせまい。
- c. 歌詞はラテン語で、聖書の句や宗教的内容をもった詩による。
- d. ネウマ譜という独得の楽譜に記されている。
- e. 8つ（後に12）の教会旋法に基づいている。
- f. 単旋律・無伴奏である。

グレゴリオ聖歌は祈りの言葉に発するきわめて精神的な歌である。それは歌う人の心が安らぎを得ることにもつながる。単純な形に力強い生命を秘め、その歌声が響きわたる様は実に壮麗である。この聖歌は現在でも歌いつがれており、またそれを多声化した数多くのミサ曲や宗教歌曲などの偉大な芸術を生んだヨーロッパ音楽の原点でもある。

## 譜例 I

聖マリアの祝日に

7. 

Ló-ri-a in excélsis Dé-o. Et in tér-ra pax ho-



mí-ni-bus bónae vo-luntá-tis. Laudá-mus te. Bene- dí-



cimus te. A-do- rá-mus te. Glo-ri- fi-cá-mus te. Grá-

## 譜例 II

Gló- ri- a in ex- cé- sis De- o. Et in ter- ra



pax ho- mí- ni- bus bo-næ vo-lun-tá- tis. Lau-dá- mus te.



Bene- dí-ci-mus te. A-do- rá- mus te. Glo-ri- fi-cá- mus te.



## 譜例Ⅲ

## ラテン語合唱聖歌

タントウム・エルゴ (Tantum ergo)

Tan- tum er- go Sa- cra- mén- tum Ve- ne- ré- mur cé- nu- i;\*

Et an- tí- quum do- cu- mén- tum No- vo ce- dat ri- tu- i;

本音楽科合唱の授業では、はじめに柔軟体操を行い学生一人一人が自分の体のどの部分が緊張しているか、また、脱力が出来たかを十分感知した後に発声練習の一貫としてグレゴリオ聖歌を斉唱させてきた。

この聖歌は単純、優雅、及びなだらか<sup>2)</sup>であるので、これを熟知した上で暗譜して歌うことは、さほど難しくないと思われる。また、この聖歌は旋律に不自然なところがなく、しかも力に満ちあふれており<sup>3)</sup>、発声的にも無理のない曲であるので数週間の授業の後には、一人ずつ歌わせることができる。

単純な旋律であるにもかかわらず、学生一人一人の歌いまわしに微妙な違いがみられることは非常に興味深い。ア・カペラの曲であることにより学生一人一人の個性がはっきりあらわれてくるものと思われる。ただこの曲を斉唱として一つにまとめるためには指揮者が必要であるが、これまで譜例Ⅲに示した拍子が縦線で区切られている楽譜を使用してきた学生には、譜例Ⅰのネウマ譜や譜例Ⅱの縦線のない楽譜によって指揮をするのは困難であることが予想される。

カルディーヌは「グレゴリオ聖歌セミオロジー」<sup>4)</sup>の中で、『グレゴリオ聖歌最初期の記譜家たちは、ディアステマタ（旋律の高低を厳密に規定する記譜法）に関してはきわめて不完全であったが、反対に旋律の表現的な部分すなわち〈音楽的〉な部分についてはきわめて入念に記譜していたのであった。したがってこれ等最古の音楽図形（ネウマ）は、次のような二重の意味をもつものであった。すなわち、旋律的であるとともに表現的であったのである。（中略）記譜法組織の基礎には、手ぶりの動作で旋律を伝え、そしてそれを羊皮紙上へ記入固着化させようとする意図があったことがうかがえる。ネウマはまさしく〈書きとめられた動作〉なのである。』と述べている。

譜例ⅠとⅡを学生に歌わせてみると歌い慣れてくるにしたがって譜例Ⅰのネウマ譜で歌う方が旋律がより美しく流れるようになる。

3) 典礼ミサ<sup>5)</sup>

ローマ・カトリック教会の主要な典礼であるミサには、歌われる「歌唱ミサ」と唱えられる「読唱ミサ」がある。場合によってが変化するミサ“固有文”の曲としては、しばしば新しい曲が作られてきた「レクイエム・ミサ」の場合を除いて伝統的なグレゴリオ聖歌がそのまま使われてい

るのが普通である。ミサ“通常文”または“普通文”と呼ばれ、5つのセクション（「キリエ」、「グローリア」、「クレド」、「サンクトゥス——ベネディクトゥスを含む——」、「アニュス・デイ」）から成る変化のない部分に関しては、しばしば新しく曲が付けられてきた。

学生たちに「合唱」の授業の時間だけでなく、カトリック教会などの場所で、このようなミサ曲を歌わせることにより、学問としてではなく宗教曲そのものの美しさをより深く体感することが可能になる。

## II 中学校の合唱部員の感想文

現在熊本市内の中学校に勤務して3年目を迎えた本音楽科の卒業生が指導している合唱クラブ部員に萩久保和明作曲の「ミサ曲第1番より（グローリア）を歌って」と題して感想を記述してもらった。

イ)「グローリア」について

「キリエ」からはじまり「アニュス・デイ」に終る5つのセクションから成る典礼ミサの中でも「グローリア」は単独で演奏されることの多い曲である。モーツァルト作曲の「グローリア」は教育現場でもよく歌われている合唱曲である。また、邦人の作曲家のテキストに「ミサ曲」が使われるようになり、その曲集の中から「グローリア」だけを取りあげて演奏している合唱部や合唱団の合唱を聞く機会が増えてきている。

以下、「グローリア」の詩と訳を記す。

Gloria in excelsis Deo.	天のいと高き所には神に栄光、
Et in terra pax hominibus bonae voluntatis.	地には善意の人に平和あれ。
Laudamus te ; benedicimus te ; adoramus te ; glorificamus te.	われら主をほめ、主をたたえ、主をおがみ、 主をあがめ、
Gratias agimus tibi propter magnam gloriam tuam.	主の大いなる栄光のゆえに主に感謝し奉る。
Domine Deus, Rex coelestis, Deus Pater omnipotens.	神なる主、天の王、全能の父なる神よ。
Domine Fili unigenite, Jesu Christe.	主なるおんひとり子、イエズス・キリストよ。
Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.	神なる主、神の子羊、父のみ子よ。
Qui tollis peccata mundi. miserere nobis.	世の罪を除きたもう主よ、われらをあわれみたまえ。
Qui tollis peccata mundi, suscipe deprecationem nostram.	世の罪を除きたもう主よ、われらの願いを聞き入れたまえ。
Qui sedes ad dexteram Patris, miserere nobis.	父の右に座したもう主よ、われらをあわれみたまえ。
Quoniam tu solus Sanctus, tu solus Dominus, tu solus Altissimus. Jesu Christe.	主のみ聖なり、主のみ王なり、主のみいと高し、イエズス・キリストよ。
Cum Sancto Spiritu. in gloria Dei Patris. Amen.	聖霊とともに父なる神の栄光のうちに。 アーメン。

## ロ) 「グローリア」を歌った合唱部員の感想

以下、「ミサ曲第1番(グローリア)」を歌った合唱部員22名の記述をもとに感想をまとめた。表Iは、歌い終って自分自身にとってよい印象として残った事柄について、また、歌って難しいと感じた事柄についてである。

表I 「ミサ曲第1番のグローリア」を歌った感想(合唱部員22名)

歌い終って、特によい印象として残ったこと	歌って難しいと感じたこと
○よく響き合って気持ちよかった。(8名)	○歌詞と音を正しくとることに精いっぱい気持ちを入れることができなかった。(6名)
○精いっぱい歌えて満足した。(5名) ○自分なりによく頑張って歌った。(1名)	○ア・カペラだったので、難しかった。(5名) ○特に高音を出すのが難しかった。(1名)
○聞いた人が「感動した」といってくれ嬉しかった。(2名)	○音が下がって不安だった。姿勢も決らず緊張した。(4名)
○合唱の楽しさを知ることができて嬉しかった。(1名) ○学ぶことが多かった。(1名)	○日本語でなく、ラテン語だったので難しかった。(2名) ○発音を何度も間違えそうになった。(1名)
○歌う前に先輩が励ましてくれたので緊張せずに歌った。みんな悔いは残っていないと思う。(1名)	

\*総数の違いは、一人でいくつも回答したためである。

以上、感想を整理してみると表Iから次のようなことがわかった。

日本語ではなくラテン語だったため歌詞になじめなくて気持ちを入れることができなかったと感想を述べた人が22名中6名だった。しかし、これまでミサ曲を歌う機会がなく最初はどのように歌っているのかわからずとまどったが練習を重ねるうちに慣れてきて充実した気持ちになった。という記述や、先生のアドバイスをもらううちにだんだん歌い方がわかるようになり満足しているという記述もみられた。また、よく響き合って歌うことができ気持ちがよかったと書いている人が8名いて最も多かった。このことは、歌詞はラテン語であったが慣れるに従ってラテン語を発音するためのもっとも重要な要素<sup>9)</sup>である歌う時の舌を柔らかく保つことが少しずつ出来てきたことによるものであり、また、ア・カペラの曲であったため相手の声を聞きながら合わせようという意志が働いたものと思われる。

その他、まだ大人のような声が出せないで歌が上手に歌えるようもっとたくさん練習したい。という記述も4名にみられ声楽的な学習を望んでいることがわかった。

次に、提出された感想の中で最も詳しく書かれており興味深かった2名の分を記す。

1)「グローリア」という曲は私にとって難しかったが、その一番の理由は普段めったにミサ曲を聞かないということで、親しみにくいということだったと思う。また、ラテン語なので日本語訳と歌詞を見比べて歌うのが大切だと思った。私は今ソプラノのパート・リーダーなので自分がわかってきたものをどう相手に教えるかが大変だった。「グローリア」を歌ってよかったことは、ア・カペラの曲なので歌っている時に、まわりの人の声を普段以上によく聞くように心がけられるよ

うになったのはとてもプラスだったと思う。合唱なので皆と合せるのはとても大切だと思った。  
(T・Oさん)

2) この“ミサ曲”を歌って気づいたことは、音を間違えることなく歌っても感情が入っていないと1つの曲にはならないのだということだ。日本語訳をもらって読んでみると、よくわからなくても何か伝わってくるような気がした。さらに、1人でなく30人でなく100人位の大勢で歌っているような気持で歌ってみてごらんと先生に言われて歌っていると、声がどこまでも響いていく……という感覚になり、すべてを包み込むような広がりを感じた。“グローリア”はとても難しく合わないことも何度となくあったけれど、すべてが合った時の響きは何ともいえない位うれしかった。(A・Tさん)

### おわりに

この稿では、前報にひきつづき本音楽科の合唱の授業内容——特に宗教曲とア・カペラの曲について——述べてきた。

宗教曲を原語で歌う場合には、ラテン語であることが多いため歌う側にとっては過度の緊張を強いられることと、ア・カペラの曲の場合は頼みとする伴奏がなく、たとえ自分の歌うべき音をとれても不安を覚えること。を指導者は理解しておく必要がある。しかし、難しく感じられる宗教曲やア・カペラの曲も歌い込んでくるにしたがって、だんだん相手の音が聞こえてくるようになり、ひいては、かけ合いのおもしろさを見い出すことが可能であることが中学生の感想文よりわかった。更に練習を重ねて一曲を通して聴衆の前で演奏し終わった後には、「他のミサ曲を聞いてみたい」、「もっと、ア・カペラの曲を知りたい」と意欲的に次の段階に進もうとする生徒が出てくることもわかった。

そこで私達は、これまでの「合唱」の授業内容に更に次のことを学生に学ばせる必要があると考える。

- ① 授業の中で楽譜を使用して歌わせるだけでなく合唱指揮用のテキストを使用する。
- ② これまで合唱の講義には、少人数のヴォーカル・アンサンブルの形態を取り入れてきたが、更に指揮をする学生を一人決め、その学生の指揮にあわせて重唱や合唱をさせる。その後、その指揮について、ディスカッションをさせる。尚、指揮をする学生を随時交替させて、全員が歌うことと指揮することの両方を学ぶ場をつくる。
- ③ 定期的にグループ毎の演奏を聞き合う場をもうけ、演奏後は学生たちに感想を述べさせあう。
- ④ カトリック教会をはじめとする外部施設での重唱や合唱の演奏会を催し、その時指揮を学生にさせる。

これまで本音楽科の「合唱」の授業では、歌うこと、合唱曲としてまとめることに重きをおいてきたが、歌い手側に自分の音楽を伝える能力を養うことが急務と考え、学生に上記の4つの項目を学習させることにより、単旋律やポリフォニーの宗教曲や世俗曲、ひいては近代・現代の合唱曲への基礎づくりになり得ると考える。

尚、本報をまとめるにあたり、中学校現場における合唱指導参観および感想文等の資料提供の

便宜をはかっていただいた森田恭代教諭（熊本市立井芹中学校勤務）にお礼を申し上げる。

#### 註

- 1) 森 恭子・山口博子（1988）音と信仰。熊本大学放送講座，「音と人間」p.94.
- 2) テ・ラローシュ著，「グレゴリオ聖歌の歌い方」，音楽之友社，p.22. 1990.
- 3) 同上
- 4) 佐野清彦著，「音の文化誌」，雄山閣，p.162. 1991.
- 5) アーサー・ジェイコブス編，「合唱音楽—その歴史と作品—」p.16. 1980.
- 6) エミー・ジェットナー著，「芸術歌唱のための発声法」，音楽之友社，p.116. 1982.